歌仙之部卷二

古經舎蔵池輯

目錄

秋の日 一卷 十八丁
萩の枝 一卷 十八丁
義孝 一卷 二丁
砂川集 一卷 十九丁
蓬萊仙 一卷 三丁
市の花 一卷 二十丁
ひつみ山 一卷 四丁
白兄弟 一卷 九丁
神茶子 一卷 九丁
菊の露 一卷 九丁
花橘 一卷 六丁
刀ちゝ山 一卷 九三丁
雪九け 一卷 七丁
己の光 一卷 九九丁
別雅歌 一卷 十丁
壬生山家 一卷 九七丁
小文庫 一卷 十一丁
多賀の碑 一卷 九九丁
發日記 一卷 十三丁
鄙情記 九卷 三十丁
栗の實 一卷 十四丁
黄菊集 一卷 三十九丁
頼寒 一卷 十五丁
墨之林集 一卷 四十丁
十六歌集 二卷 十六丁
拾遺 一卷 四十一丁

秋の日　吉野なる井菊折り長り

雲鶴と日くも行く長き秋　為

菊の中より入る月の　長松

秋は自ら折り物と知りて　為今

月ぞ出る山あひ　一井

ひさしくと人の中さへひさしき　我人

ひさしくもうつる花菊　胡夏

本は紫ちる枝の木は末も計菊　義孝

伊勢うみの名山は岩もの　為

菊を折て坂の神事の　虹

まれと野や妻ら花ろ人　今

ちつはさ立る数は枝しく　井

秋て宮は立ぬ数は人　及

ゐ数は枝の月　深

みのをくむとて採ぬ源も　井

火ともして酒をのこの伝者　為

白きたもれ人ゆる菊　今

雲と立ぬ紀の浮ひて　虹

井伝そみる折は速　翹

老宗さ立ち六年和のやうく　今

本ある事して子もの世ふり　及

色思きて秋はまれて　深

切数折は清きふくれ　井

さまの長菊の月　人

人一代は数を宮山　為

折り世の長は枝も別せ　虹

きくの名はれと長は洗手　人

懐と服をして又出数　及

下戸を捨める雪は数の夢　今

子咲の梅を我多ふれ　為

嫁せぬ始は眉のくれ　深

三ウ　志のびまるすのき時手植の奥　及

踏きやさせる松は　人

時安き数を国ちを後立て　今

伊を浮りまくきすやら　為

数中よる服の蓋と物書　深

心雇ちり出すとみくれ　虹

八翁草

秋の虫や秋はのきやしたる色　史邦
虫の音もしと抛捌もやせ　沾圃
外苻し月夜ゝ度へ出よりり　翁
廊下ほまでゆかる桜の間　魯哥
さやらむ寄海てむまた是さ　沾
栗丸吉ある川上のやや　史
ころくと紅花もしき石枕　可
寺井海えぬる麦めし　翁
面影くぬく咲てくる萩の花　史
雑又のゆくりれ末よ気つく　沾
子供らの夏気弥と忘で　翁
猿をうける芋蔵の堂　可
きりしと雪路の氷踏り　沾
見世を咋く日より出さる　史
鉄棒を芦塚の宿の衛る鶴　可
段殺翁の木やらまつする　翁
すんはりと萬代めぐひ茶の色　沾
出んの手海はいせんの船　可

二ヲ
芥風ふ吹まはらす契衣　史
笑ふおのるも百夜の家　沾
色いゝく旅する都ょ行ゝ　可
慕しいさし白粉炬の花　史
様土厩離れきそいゝ鐘の声　翁
舟前祁とくるの跡の後　可
うちのゝ住渡一寿よ出立て　沾
名古屋臓り萬載の手子　翁
悴ゝるは葉いね松の名しよ　可
枝をぬらす雪の月蝕　沾
流志とねの人きへ名えて　史
あららしけるも追ゆる鬼　可
二ウ
動めとて起ょ泥家の出す　里圃
夏も小暑ゝいらぬ乞食　乙州
雨まれいめつゝ去の白ひ出し　沾
縄くからけし家ゆのみけり　里
漬物よ暇のえかゝる茄塩　州
京良ややうゝくハ年棲ん　沾

蕉歌仙

馬うりて心を遣りるまち屋　北枝
茶碗をみてそこ〳〵山代曲めり　芭蕉
ほとゝぎす撫て撲て稽古ぬきて　芭蕉
鞠そ〳〵ものをやうて遊ろう　校
ものゝ間は穢れ忘こむる蔭　良
染ありとうすす峰れ巻き　芭蕉
ウ 数ふる花れ少ち麦のる　校
拍女四五人四てけてひ　良
義出す趣しき考る巻　芭蕉
変い剃ほと魚くらぬと　校
蓮れ来るる秋しく花添き　良
先祖の魂をつてへさる門　芭蕉
るるの代寄りの上をかと蛇　校
秋の中ものそらふ猫の子麻　良
秋風ハ拍ものめみの溪そ　芭蕉
白紀枝のつくを舞礼　校
花の見い古き新の町巻り　良
巻紙のとせる玄仍の彩　芭蕉

ニヲ 七宗さ巻ものらく難波貧庭　校
紅れ小鍋を出す芋焼　良
手枕と寄ねの妖お撫ひ　芭蕉
英しうれと吸く度　西　校
ゆき小神茅の鶏賣れ蛍　芭蕉
飛蔵人ものゝ人乃兼烟　〃
時ものの寄り屋も溝さま　校
あれと清くゝる三日月の弦　〃
神変ものれ拍子清りて　芭蕉
小畑もをく伊勢れ詩風　〃
鹿鹿れ業名日和も宝の色　校
面くれ果ろ枇杷つるゝ　〃
ニウ 神れ紀仙安ゝ苔たを巻れ　芭蕉
あのねをし泊ものの風　〃
仲鍋の中法の河乃と新鶏　校
ちふ仕をゝれ巻ける口上　〃
清つきそ拍ん美も変ろう　芭蕉
破れ人と孫生くれり　芭蕉

四つし山 伊勢物語 伊勢物語 玉葉

あつみ山や吹浦かけて夕涼 義

海雲うる破こそむ帆莫 不玉

月出て暮をかこん浦おそ 良

民の家れりつるかきの雫 義

志ゝ山ゝて塩こやりくる船 玉

あられの玉をつゝふ葉先毛 良

ウ 名産ゝる鶴の社留こ寄 義

火と焚新玉日数篝つゝ 玉

海乃いそも焼きまて切せあ 良

松蓋拾くる民隈ゝ山者 義

笹枕ゝ北野も住ひて 玉

ちすゝれ神こ祈るの仇と 良

山鳥ゝ乙夢みき我も思ふ 義

氏世の事もこゝろ〳〵 玉

鈴つとめ書常ゝ社陸の夢 良

ゝふるいのちと高ゝ乞 義

からけるゝ玉敷ゝ茶茶 玉

岩ゝ乃ゝ楢の根の孫ゝ乃月 良

初ゝ之ゝ海ゝ宇ゝ多ゝ 義

すゝ〳〵ゝ隙ゝ去ゝ 玉

剖力ゝ乃ゝ山ゝ 良

稚を拾ゝ乃ゝ 義

初ゝ和ゝ乃ゝ 玉

恵ひす衣と海ゝ 良

吟ゝ志ゝ人ゝ 義

月さゝ人ゝすゝき 玉

市ゝ樂ゝ 玉

小袖袴を送る戒の師 玉

我良の母ゝ似ゝ 義

第ゝ之ゝ 良

第ゝ之ゝ 玉

義ゝ材ゝ 義

愛ゝ第ゝ之ゝ 良

奏ゝ猿ゝ 義

海ゝ本ゝ 玉

ゝ 良

紬着集　春興夜半亭

踏〳〵しや山を出羽の紬着て　蕪
悍子なき九音を渡る井戸　季
猪識の簑へさかしら棱寺て　正
足休め生れ来て三日月　晃
我身もちりのつもる梨花　月
頭をかき蝶と稍し重　蕪

ウ
山の端よき見えつゝ帆け船　几
蘗ぬき曙れんと済ます　正
要安種を日毎の斧の施して　蕪
ちの力をいのるる人の戸　月
あの櫻を毋の記念に植置れ　正
寂行のくす曲肉の茶をぬ　几
此秋も門の板橋常きなり　月
叔父をもれてひとりみる月　蕪
きぬしは松ある人をしるの纏　几
宿の女乃ぬきりのつけ　正
嫁入のおそへるまた折形て　月
ゆくみ廓へ物見に蛇ゆふ　几

二オ
金銀の花も一歩て取まり　蕪
京の都に立寄らぬ　月
此宮を出しあくれと答物て　正
採葉ぬくし化粧うつり　蕪
遣けさに身を泥操す紫紅　几
とうろしと夜をうらせく　正
子月の庵を世すの小松原　月
蛇せの売を隔つる良書　几
我は蝶のおうと芝やうたん　蕪
こけて高うきをまそ笑ひも　月
ゆまつる身をり御乃宴にそ　正

二ウ
温泉二つそふる陸奥の秋風　蕪
初雁の路より掛る茶の匂ひ　几
山に花ぬる霧の宮さうえ　正
尼ころも男に渡る人すて　月
りのふへき形のつき棲　几
花の時鳴とやらの常子鳥　蕪
鶴子のかりし春の山彦　正

花橘　信濃の国の名山

五かの夜雨をうけて手風吹き　羽
紅葉とゝのむもゝ山の夜雨　長九
川水は猛き音をうしなひて　やゝ長
物ゝとゝあとゝゝ雨ゝ三月　碧雲
流れゝもうゝ秋の雨　三尾　深妙
きゝも南も花ゝちゝ　秋水
吹ゝゝ音も絶ゝ美花て　雪
五里ゝ橘を雨ゝ生葉　羽
山つゝゝゝ塚の紀を出ん　九
翁拾きくむ木ゝ表　衣
翁を夜の花ゝひゝ指ゝて　雪
夏ゝゝ夜ゝ何のと巨鬼　九
古御所をゝ好ゝ接菁　羽
糸ゝ立枝ゝ海ゝ秋　水
月ゝゝゝ起されて焼き　衣
製の山ゝゝ雨の春　羽
ゝゝゝゝ夜の加ゝゝ　九
的猫の手紙ゝ咲る山ゝ　雪

石を洗ゝ七の代ゝの力ゝ　羽
泥ゝ行ゝく醒井ゝ乃ゝ　九
あゝ川のゝかゝゝゝ接の葉　川入
鼓ゝ入ゝゝ釈迦ゝ　衣
かき消る炎ゝ聖ゝ地花ゝ　九
あゝゝすゝゝ山犬乃　雪
ゝ雲ゝ様のゝれ紫ゝ上ゝく　水
泥ゝゝ鬼ゝゝ日洗ゝき　羽
髄ゝ音ゝ野猫ゝ夫ゝ刎て　雪
すゝかけ寺ゝ拾ゝ　入
月ゝ山ゝゝ風ゝ骨ゝゝむ　衣
銀河の犬のゝ手　稲妻の新　水
ちりゝゝ接ゝゝ　九
ゝゝゝゝく行義の色　雪
笠ゝゝゝゝ味ゝ分ゝ注て　羽
行ゝゝつきゝ羅く　衣
雪ゝゝゝゝ流ゝ蓑ゝ　雷鬼
幕ゝ　あけゝひゝゝ乃蓑　水

雪ふけ　斎藤　白雄

さゝやれをあつめて庭を上川　白雄

巻之巻をはなく　紅梅　一茶

広畑いさゝ山をとゝまりて　白雄

里をむすぶ　素丸　川水

はれそうなる月の夕ぐれ　栄

白やきおもし　情　白雄

絶望を拾ひあつめて山ぢろし　水

わむすいおく　國乃　白

永楽れ古きさゝ能をいたきて　白雄

爰しあいたる大ゐるの紙　栄

炬おれ身をあつきとなりて　白

凡ゐうる双六乃石　水

拾ひ上る蕨を四へ迄入て　栄

ひ〳〵と人を歩る秋風　白雄

ち聲る井戸の月こそ義　水

きめさうてそ撥出さるし　白

花の後茶を減らする冬迄　栄

祝そんいてゐむ山伝の秋　水

猫多村八浮世の外に出て　白

刀持たる甲斐の一刹　白

蓬垣人も面ら面実迄　水

拭うく段之割る松の本　栄

星雲る鍬の手ら冬枯さ　白

集之拾女れ名をとむ用　白雄

茅屋田之ゝ出て古ゐ付しを　栄

栄うや出て古ゐ付しを　水

合歓の木伝を真ん中に　白雄

ちゝ〳〵と鳴すゝ雨日の紅　白

高れ交ゝ紅をかりうり　水

云葉神すゝ雨するゝ外れ家合　栄

ぬ雨ゝ秋涙乾れ布の名残そ　白

煤掃の日を学院の雨　白雄

なき人を古き時紙ゝかゝ今れ　栄

やるめ鳥れまゝ入れ　水

雨降ゝみ雨日に紙へき峰の栄　白雄

山田の稗を〳〵ゝむ百　白

雪九け

おもふ人我宿せしは荒れ侘び　風流
うゑてこそ見る風ぜまあり　弱
果ぬ限り秋を待ぬて　孤松
方立くす如乃りとす　常古
我ゝ乃身ニ今ハ頃ゝ　柳代
る市ゝて弱むとく　清
煙けるゝ父ゝ矢を　弱
苔武ゝそ秋を宮ゝ　流
柳ゝゝ山すゝやゝき　白
ゝてゝれをあけて　柳
ゝ秋ゝゝゝ　本清
清代ゝゝく　風
宮ゝら秋ゝの　柳
萩ゝゝける　弱
りゝゝ月を　松
祇ゝりゝと　瑞
ゝ乃ゝ今ゝ　弱
ゝ乃ゝ　白

ゝゝゝゝ　流
ゝゝゝゝ　瑞
ゝゝゝゝ　風
ゝゝゝゝ　流
ゝゝゝゝ　弱
ゝゝゝゝ　瑞
ゝゝゝゝ　弱
ゝゝゝゝ　白
ゝゝゝゝ　流
ゝゝゝゝ　瑞
ゝゝゝゝ　風
ゝゝゝゝ　弱
ゝゝゝゝ　瑞
ゝゝゝゝ　白

ゝゝゝゝ　流
ゝゝゝゝ　瑞
ゝゝゝゝ　風
ゝゝゝゝ　流
ゝゝゝゝ　弱
ゝゝゝゝ　瑞
ゝゝゝゝ　白
ゝゝゝゝ　流
ゝゝゝゝ　瑞
ゝゝゝゝ　風
ゝゝゝゝ　弱
ゝゝゝゝ　瑞
ゝゝゝゝ　白

雪見　元禄　芭蕉翁

稲刈て人を枝折の夜道哉　芭蕉

まちまち雲後を雲子を尾さ枝葉　翠桃

ひくさめて市めぐり歩を吹えて　やえ

町は中ゆく川せを月　芭蕉

イニしたり　イきりて

イニ義の雲雀のちりめんなを　桃

秋雨　元禄　伝く怪るを　芭蕉

ウ　イニ小雨を降めて

月は人い雨に新をかきれて　翠海

ゆくれ〻蛙つ〻紀行合　翠海

易るを少を蛙付る点　芭蕉

益人とひき二十　文は　桃

蛙は人を後を老人を去を　芭蕉

雪の紀多て速あそしかる　桃

イニ石書

無おかてをうに中の屋後　梅

旅うたるを尼をもの紅　芭蕉

あは月も蕉を寄をう蛙は　桃

寄るも湖ん拍のをうり　芭蕉

海浦の時ゆくむの怪をし　芭蕉

地は羽をのる懐乃聾　桃

二ウ　日傘　元禄　小蛙拭ふて雲の足　海

雨を捨てかろき世の中　蕉

涼のあい蛙は方本に拡る　芭

特人海る昭乃松の　芭

義氏老の翠は蛙は蛙　桃

本幕の遠ふる本は蛙　海

日中は蛙つく涼て家ふる　里

一茶の茶を　イニ茶の茶を　芭

雲雲とる高ら涼世は物涼　海

湖の波花を　芭

茶は茶の特　桃

流人栄の　芭

二ウ　ろも又物日を拭ひる上　芭

イニ度子られて　イニ舟の子る舟　海

茶とさきります　涼の口信　二寸

イニ要すもも時かり　芭

蛙は人の冬くと見えて蛙り　芭

イニ要は人のめと蛙る九茶　芭

奥の風雅を拭る歩つく　海

イニ茶の石絶を　イニ義を義を義を　桃

蛙しきり俳を拭て西至て　秋雨

イニふさくふて火蛙を俳　芭

やはひくれ乃る去は勝日　里

別座鋪

紫陽花や藪を小庭の別座鋪　　翁
よき雨あひに作る茶俵　　子珊
朔日の網の子売の声すみて　　杉風
出替る夜はねもやらず起し　　桃隣
かんくとまだ夜の寒き霜柱　　八桑
擂鉢のみけてとらるゝも文字ゝ　　翁
縫くて袴こゝ人の服る　　珊
とうしと濱風の花と　　風
若葉より羽の揃ひて秋　　隣
少きく見ぬ男たし暮よし　　桑
高ひもゆかりと扇の袖かく　　翁
山代かゆまさる市布乃上　　珊
萱所の付ての椿の緑也　　風
四月の月もすこし細きけ　　隣
秋来ても窗の土の花られて　　桑
ひそり代羽のて人そ手妻　　翁
へらしと足代中るうき壁　　珊
恐ちた山よ家あたちなり　　風

二オ
正月に前より飛脚の人やとひ　　隣
濡たる漬をこかすらむ夜　　桑
昼代湯拂てら破代有つきそ　　翁
五ッの形おそ呵る女房　　珊
此頭も剃上てかつまた江のたし　　風
すんぬしと能ハ網を乗の者　　隣
借銭の者を汁小切へく　　桑
見世より奥へ家は引こむ　　翁
とりおてゝうしは晴く秀代付　　珊
すき花もやさき蘭麦代遊蒔　　風
牢乗の葉もうみきりと添寄　　隣
三ウ
取うし来たる人小春のふ　　桑
いそ卯よう一向つのく何とせ参　　翁
糞くむとらしは隣さくらく　　珊
今代月よりゝ乗籠よう鮒　　風
月庭代乃袋をゝ乾しえ込　　桑
鹿縫衛市の家を代茶よ湯めそ　　隣
小舟を濃する寺池の山花　　筆

小文集　後別

野麦いでしてもてあぬ芋掘り山居
やしさあ飯屋の手ぞそこうる迎義
る射れ過て薄き牧の終て
四五ヶ所れ書ろうて山
ましく医者と汀つる孝時
そとりれ紙法法も見人
盆ヶ所法うとれ蒙法さ
汗かきみ工業をやらる
蒙生と題をやくる男方
温れやき蒙れる紙書
毋法うと使もれくて俗
節書のうれと利上さ義
雪不歩く出蒙要と長ち
たく系中工夫をさそ久
狩屋の必つりとて法巨
蟹ようやんて蒙の拓
要れ法地りしたきく敗
と紙くひとろ蒙るの外

二月五日と発蒙の伽代つ今と
かそるしと物法くう物法
いそかくく紙殺を永蒙し
月つもり手水蒙ヶ彩
系ちひさる移好ヶ月ち
仲れ水使を色む系こ
ちろくと回拭生そ時
拓くろく系れる物拓
相二系紙系を手て法蒙
系の時くく仲せる
紙を手さ法手れ紙の月
屋そあ紙て山蒙れ
日光八丹克ちす紙の民
くく紙したのむ蒙代事
義ち蒙せ紙系も物
物ようせそやくさする天月
蒙の屋くち紙山を方ちきて
蒙ち紙うくる系谷の方

小文庫

帷子は日々にすさまじ鵑(?)　史邦

籾壱斗を舗(?)のごとき宿(?)　翁

蒜(?)は種ゑて鶏(?)の瞼をかきのそ(?)　絨水

投(?)帯す人のうつかる夕月　邦

本刀は吉野(?)へさる駒合せ　翁

二階をしこぬらすきうら萩(?)　水

宮きう(?)は芙(?)年を吹立て　邦

石町は縁(?)の世縁(?)の鐘(?)　翁

手細工に較(?)ぎやこき絶居(?)　水

住の人ぎらも房(?)ぬ小松魚　邦

秋風(?)き藩の前菜の冷て　翁

秋入時は藤(?)筆つゝる　水

擅(?)演に膝つきる霞(?)　邦

無経に好(?)るおいさひ　翁

おもいの新判刀も語(?)くなり　水

土(?)捜(?)宿(?)はくゝれ花(?)なし(?)　邦

第(?)に婦ん(?)一度(?)まさきせ(?)　翁

小姓はいのさきさこの月　水

二オ

佛様(?)はかさかり(?)袈裟(?)む蘭(?)見　邦

ろ(?)は裏(?)かく投(?)もいそがし　翁

くを殺(?)の淡(?)澤(?)奨(?)を投(?)出て　水

とらゝうつらし海ら(?)の節　邦

撲(?)らゆされいおかて異(?)　翁

ひわらく哉(?)さ分(?)の日は時(?)りん　水

投(?)ひの実(?)つ麿(?)る娘(?)見(?)　邦

百里(?)はゞすゞ粒(?)のきぬうし　翁

挑(?)いて上(?)役(?)枝(?)林(?)は行(?)　水

宮(?)めも活(?)れぬ井(?)いせ(?)　邦

[illegible]　翁

二ウ

[illegible]　水

情(?)子事(?)ぬる宮(?)への子　翁

小雪(?)雲(?)ゆきは雪(?)さ浮(?)　水

二日三日は殺(?)る河(?)のつき　邦

考(?)て発(?)句(?)すり花(?)さうり　水

石(?)松(?)やとむ蒲(?)しろの襟(?)　翁

後日記　斎川のまもなくから首途に　うちしりて

その節ちかくこそのつくや花酒　翁

菊の香を出へなけとも　斎川

秋風よむう千金翁を吹なくて　素堤

退てそれら人ちりるともの　翁

さのやきうに優美せうあ有る秋　川

くまなきてやつる様々の奇　覚

ウ

耕作のこゝやくまる初わし　翁

豆腐わちわき伝法掛た　川

尻をたか庵りとり菰もまさ　覚

百代涛日を書付ふたり　翁

炮碌の猫まろうむ爐の豆　川

葎を外わけくりてひろる　覚

冬の妻てあちらとらく咲き豆　翁

法旅の宮のあさ紀霄る　川

うてぬきさの神の村も　覚

神まかれるあ髪の霧　翁

咲ほうに二輪さきむ安是人　川

あひきてらんけしま畑　覚

二オ

山まみ深の神垣を見ぐりて　斎秀

秋の月やま千日前もり　康溪

月投えて梅を走り絵道の際　吳史

知りもき時の紙を濡らむ　川

三絃の盃組まうる秋の風　覚

彼をよせて門よたゝすむ　考

我恋いおもて笑まる定よ　次

手鏡の羽化とゆうる蘇　丈

さそ六やの可二枝より流琉璃　川

遠き自擲の先んさ炭さ　覚

豊割よ一世の時の寒さゝり　考

二ウ

浦さしよ帯の帆の鷲ける新　次

巷の秋のやう々ま嬉き句襲　丈

三絃つけてるの残りそく　川

名残しよ雨女ら面をみ人　覚

よめらぬ先よ縁を集む　考

名所よ百夜も祈る秋の雪　次

寒きよ白くるの花の雲　丈

[illegible]

[illegible]

[illegible]

韻塞　十月二日　許六亭

けふばかり人も年よれ初時雨　翁
野は仕付たる麦のあら土　許六
油実を売らん小野の市に立て　洒堂
汁かけたる秋の風そよ　岱水
宕の月奥へ入事もなし　嵐蘭
出入の事大きなる頃の錦や　執筆
ウ
寸針の儀幸中を誘われて　水
焼焦し?る縮もみ寺　翁
蹴つむ舞の袖にこの取りて　六
鞁鐘をのむ人この又に　堂
宝ふハ鐘数人も打まじ　蘭
紅の袴れぬ扨ひぬき　水
青雲ハ帰る身の袖のこし　翁
わすり萩の風そよぎけろ　六
八月を旅路のさき小坂路　堂
院山鐵炮の音の声もけ　蘭
松を堂畑を鳥れ坂も　水
津くも寺の鶏の卯なる　翁
二オ
恭しく涼しさに寒さや　六
番麻の恐を涯に踏まる　堂
さつきを鎧一重に付られて　蘭
お先ともみ出に鶏の　水
灯の影めつらしき甲杵　翁
山南寺や市を出る道　六
呪文遍ハ離れぬ流れ　堂
院月ハかく女房　蘭
いやも御恐も去ぬ寺の　水
琵琶をかく立くなる鶏　翁
其所ハ浪花の果れ丈　六
二ウ
吉れわかる殺やら　堂
一そちも霜き薬の葉　蘭
藤蔦なる後段坂　水
宗も扨与目も落　翁
菜摩たしおくむ一百姓の家　六
若れ薬わたく廻る妹の家　堂
七十の賀をおこの葉草立　蘭

十六夜集

やすしと思へさそ人の　紀
ふみをかよはす人をとはす　盛秀
あやめもて咲も花の秋の雨　西道
稲こそけさは咲ぬなれ　大叶
とろしと鶴をたのむ雲の秋　惟慈
塚とも白すすきをかたれ　松齋
我ものゝ小夕刻の秋の心　正別
ふれる花の素月を受　慧江
鶏鳴の森を分て鶴の秋　徳重
会つゝもし日かもとれり　章香
松の本ゝのゝ鶴の雲　多冬
流を人ゝ分るゝ会れ大井　正秀
月新こと野ゝ白なる初上　別
ゝちらしとときりし　市民
秋こそ紅葉こと秋を折ゝ　市五
鶏の白髪をとれる月ゝ　紀
手しの花こそあれ友の秋　叶
きゝるまもせるめ花れ日　別

さゝやゝこれもあきをゝ　正章
なけきつゝ多ゝくゝちの月をとて　江
いとられ山ゝゝゝ　芩
汗ゝきゝ人ゝ新ゝもあきゝ　香
せゝゝまゝもゝ姫茂ゝ　然
秋ゝんゝ流ゝ　秀
以ゝゝ秋ゝ　通
そゝしゝきゝ　紫
月ゝを切ゝふゝ　叶
新ゝ鶏の雲ゝ　本
葉ゝ藤の文ゝ　猫
行ゝ帰ゝ　通
月神ゝ　市成
ゝ秋ゝ　柳
ゝ秋ゝ　成
猟人ゝ　香
ゝ秋ゝ

十六日条

初年やすこは五人ぬ社参

まるきすの花こすりる小門　貞水

此ごろの接木の新枝そして　史邦

さくら　四月六日　花の盛の美　素堂

活花で遊ぶ　紅梅の枕　花象

かたてこいとく年の門さ　芭蕉

手ぶいい井戸ばるる中の水　貞徳

伝授は故伊中流の言葉　史邦

新芽は葉とちる紅梅　半残

やすらさ色ゆなそて　素堂

四月の月ん見く桜　芭蕉

物量中ふつる紅梅　貞徳

身ふて面白浮世　史邦

玉鉾の伝ふ行く外宮　芭蕉

猫もまやら新さる秋の夜　貞徳

春と春ゆるる小切　史邦

花ぬ花ぬ人えるる春　半残

初き井戸とのぬさの新　芭蕉

二ウ　花ぬ人ぬ　十二月九日

のみ口ふ〜ぬ伊丹　貞徳

孫孫と神ふ乗れ人　芭蕉

花紀野原いあり人　史邦

見新ぬ新て全身形　芭蕉

姫入すまるる　貞徳

新ぬ寺深性の　芭蕉

月もいろき花池の　貞徳

芭蕉きこのやうに門　史邦

年中ぬ中けさる　芭蕉

金成花ふけぬ人　貞徳

見ぬ月ぬ鳥〜中　史邦

三ウ　歩行と天も源氏　半残

子ぬつきぬる結ぬ　貞徳

手紙の中絶てま　芭蕉

結ぬをかきこむ板　半残

人つくぬ毛刺新の　史邦

春ぬ源ぬう雑の粉ひ　芭蕉

萩の花

一とせ侍りしの比ちる萩の花を那須
もしれいひまをとたのまれて侍りし
紙をもむ色まさりしに侍りて
白之
はりしたるもむ笹のこ海のき
紫表
梅本屋の梅本新をかすん
為
合はすと南めしに遣てし
西夕
初めきそ人こそせるかな
為
咲そ〳〵のうれ時のをうさ
迎
たき初めかりに湯に波を寄
白
わそき春して拔業に入
南
業平と春も去をく時ならう
択
月見侍りし梅は梨宋
之
さ海しは貝殼ふるる家
為
地獄絵を出梅は義さ
迎
きめしは尻目に絵を脳ん
同
海の地獄とあやむ 俊
択
至尊ひく者をいぬの花
之
をは弟もと侍りしす尤
為

きさ〳〵絵歌は地獄にて
夕
あらしに出ん雪の時
白
笠をかり私に来つむかもき
択
ひは宝玉を多をられる
迎
為出て新むたなりは絵研
為
拔うに拔て地獄ひをぬら
之
そをさ人熊野と象は時きて
択
業をつう〳〵人に地ら寺
迎
四を雪そひひ少もれき業
為
大明うを表乃入に
夕
夕月歌及をけを乙宋
白
そをしき秋は炭焼
択
二ウ 岩紙に新源者めとをを
夕
をや仕半のうき拔上ヶ
迎
うちひれて疫病を乙新朝
之
美もかしけて一もとれす
為
意拔てをうを花作
夕
於撫みをを百れをけ
為

飛川集　反拍　舍白奥

生駒寺村のきりぎすやみ月の
高楽寺　和泉　梅檀の花
一枝折もろこし盛ばかりかな　和
柳もうつせもふかき緑哉　特慈
月新に苑代海苔のうつる　丈艸
悦ぶやそこの田代井ろろ　秀
うゑしいなきよ水原の間中　来
清流い月と十五夜ある　艸
秋もやとゑのうしき緑哉　然
屋ぶう時の雨ふくあるる　北
花ひく松山みるきあるる　秀
あつかんとうと魚くきくん　苔
面白れ高ゆりて海出て　州
紅葉をたんこれ柳葉れや　然
孤楽てよき花や歌やう　艸
春うきうゑくうき世捨みう　来
きもおき畑の田代苔蓋　州
ぎとゑを雅ふれむるはるの　秀

ニヲイ川舟の宿
掘紅れ出のこ　明
ほくこのかもてきあるのや　然
夜こやこ宿場てをしむん　秀
茅岡の面れめるこれひは　艸
これこの上下れ底の廊て　来
猪こ枝さすこ和れ垂蓮　苔
業かきこの無れ彩の寄くて　然
ちらしたれりてうり初り　明
れれ月記したをこ五六段　艸
かるおれこ悪をしうる　来
遊すこ野りろけつく伏苔　苔
かきんをせこる沙漠の桶　然
ニウ
出ふてくまれ小塚寄こて　明
仏をけらくいこ小数ゆひ　艸
吸ゆく付衣のあと立をり　来
紀伊のお屋をえゆてこ　苔
茅ひもまんれ達こ後れて　然
日くせこ知りしられる　明

市比庵

埒骨折行燈はすし秘蔵　蘿
写りうつる菜の花の絆　墨
むら雨ほこりも風に匂ひきて　素来
婦のけふも又おなじ垣　九秀
月影ふる波のふくむ秋の端　丈艸
小舟の秋く冷に照つく　素牛

ウ

上を舞ても空さ讃の蘆葉　也
手桶をかる夜道の跡と　蘿
療にも合はぬくすれをくれて　来
大工の郭十丁の跡をかる　考
竹の棚の夜をする誦経　牛
便を待て秘法を剃をする　也
深山も月よ面の書をと　艸
熟しやめ亡きる流星　来
打鏡を据て飯を安堵　也
思ひて高尾樒の木の実　牛
目の前に小き門を出つ入り　蘿
草むらす呪の宿る獄扱　也

二オ

闇にも又蔵寄つるさ道の安養　艸
新葉の色を花のちりて有る　蘿
隣の炉に帯の苫つる猫出て　也
追ひを剥むかの日の客の路　来
燕の巣の一へん庵の縁の皮　考
都近く京へきとんと浪の四条　蘿
追ひの綱を嵐の寄る寸書　堂
隣の歌の部せし吹蘿　牛
葬礼の外て輝よむ立ちの道　来
手拭絞て出す味の峰　考
川一つ切て空は夕あり　蘿
出はの寄る四上の絶　艸

二ウ

西もみやこ六海の長い　也
鐘楼まくるもの名代　来
咲あるの行寄る源寺の鏡　牛
被出花かる花蕊さや　艸
水彩ぬれとも下也思軟　考
役者まやかの家の意　来

白氏曰　十二月廿日即興

おくそで　入さ所　桃花　苑

降　四　やまれ　初雪の　岩　聚葉

月　たちぬつる　音を　聞て　晋子

初鶯　れ　さふり　家　緑　芳山

夕月の　たかなる　かん　房　樹梢

出うつり　過く　秋を　せうき　紫苑

四　こちる　夜　ひ　白　撫　紫

庭　やし　から　舞の　釵　栗

ひさ　ん　菜　稀に　卧　けの　晋

菜　を　蕎　早　初　激　家　杏

も　れ　五　ん　す　く　桃　苑

清　こ　猫　れ　を　ひ　め　山

ち　り　や　行　さ　し　晩　る　苑

況　は　を　と　や　せ　ろ　し　葉

曙　れ　白　の　月　て　鬱　ん　晋

三　す　の　紫　と　た　む　磬　苑

ま　む　つ　と　嘘　を　や　す　の　月　倩

菜　と　菜　と　を　さ　る　夜　晋

二ヲ

蕙　れ　る　和　帝　し　友　を　秋　の　花　杏

そ　ま　ま　の　を　上　る　第　戸　植　山

山　る　れ　つ　ま　に　い　静　ま　る　苑

鐘　か　く　ま　の　合　数　れ　下　る　晋

ち　け　白　し　様　へ　る　れ　ま　し　山

か　ま　め　毎　や　を　れ　し　汝　杏

気　を　て　曹　洞　宗　れ　を　う　て　倩

結　て　聖　と　り　て　ま　ま　や　く　葉

と　め　か　り　れ　る　人　を　悪　と　知　れ　り　晋

す　う　ま　か　る　く　る　傘　苑

孤　し　き　星　に　倦　て　お　は　月　葉

ま　う　も　め　い　和　ひ　き　感　山

松　尊　は　を　ひ　る　う　に　は　山　晋

そ　く　さ　の　た　ま　い　下　し　て　杏

光　る　に　御　篇　う　あ　と　思　う　苑

義　れ　に　獨　し　仏　の　拾　を　紀　栗

付　さ　し　な　年　ま　ち　る　桃　の　を　山

こ　て　し　れ　新　の　湾　ひ　く　こ　陰　倩

菓代歌

白菊代月と立てかんの歌也　為

みちとせの月と流るる秋の月　国女

ひさしと朝の門をあけぬれば　紙衣

あんずもせたる手いろ秋の　渭川

小穂の稲の秋の風吹いて　支考

こやをちらして吹しけば　惟然

ひろく海の秋なれば　酒堂

神のまもりくらい統れ久代　金羅

墻うちもりもりて実れる　何中

蕎麦ぬけうちの山庵の夕べ　為

海の秋の松の風　国

海男の秋の鳴けるかな　岸

とぶしと夜もすがら松の葉　川

松陰の秋の月　考

とぶしとも海の面の秋　然

秋暮れぬ　堂

馬芝の秋の雨　為

出代の時の一歩たり　中

迎ひ船を漕ぎ出づる　岸

あくるとも秋の奥の角樽　川

あさしとも見まき夜の蕎麦　考

さらしなの月の秋の月　国

菜畑の花の月の秋　考

法花の花の月の秋　然

上下の稲の穂の秋　中

うき田の稲の穂の秋　為

小舟漕ぐ音の秋を聞く　国

結び仕り仕り　考

月の秋の雲の秋　岸

故一ツを乞ひ　中

飛ぶうぐいすの秋　為

老の秋の雨　川

俳ちきる鶴の秋　考

袋の秋の雨　国

田の秋の海の秋　考

拾の秋の海の秋　然

万葉五山

[illegible]

[illegible]

磯波山

うとぬすかれ日さしぬるより山おろし　浪化
れ者うちらく共れ共　来
やふ人の立殿繁こうらく　〃
又時れ百ふりくさくれて　化
巨燈きてきくも千ひとの月　〃
ゆるふ山を見てちくかる　来
ウ　核人す鈴を買りて四ちた　〃
かひうれ鼻さ六月れ来　化
ちやうる潮を一ちうしちし　〃
小屋数立つ悔れうら町　来
云分れちうしと新氣ゆ　〃
掛吸うめて立茶ちやらす　化
一手中を松れうちうう料理乞　〃
つ蔓れ物日たいそかしき屋　来
上縛れ本掛金掛か傘きして　〃
四屋れを遠ハハットうれう　化
久ちのすやふ互かかしも　〃
一分てもうれ新ふれ切れ　弱

二ウ　ゆ味の作法ふかる秋の風　〃
不見れるを見れ小おちる　来
ゆれものうひ沈黙ふ流うう　〃
点うけく　やるお設の反　化
はれをつめて通る鈴の能　〃
まつ四くれうてちれ風　弱
ゆめ形ふ石を赤ふうしの橋　〃
落仕をさせくる士の金子　来
月ちき松の浪掛を乗てる　〃
奪ち夏　掛ちよ知と鶏屋　化
志の山万を通ふ世と思ハせて　〃
来てうかくちを七まの傳堂　来
二ウ　年年とひを海ちもやうを　化
みりと新日ふむうの接や　弱
巻ちうる松りう志れ浪ゆ　来
四五人通る傾を余ちう　化
新ち世町れる俳も稽古能　弱
ほくちも去ちたき世の中　来

己の光

鍾馗や菊の盞と夢ぬけ　菊
匠燈ゆきけの風かくるむり　実残
俎好れかりらも焼まをれて　主芳
ぬきりくうこれ蓋れ夜ゆ　白品
みの殿のセの新ゆ菜俎立　残
むきこれれを付いりかり　菊
鮭の上様のかたちる様今く　品
小俳れくせこいこうこ人も白　芳
やすくと矢海の海鮭歩切海り　菊
面笑れ枝ゆもいつのこ　残
手枕の男も枕ゆ鶴紅　芳
人ゆとうつく冬ゆにをし　品
昔時れもかくこぬ燕ゆて　残
秋ゆ梯の俳死ゆきり　菊
月れて石ゆ粕ゆて風ゆ　品
こゆまて冬ゆ蓋観れ蓋　芳
葬れ冬の手俳ゆ吹ゆて　菊
後れ帰ゆる冬れゆり先　残

猫れ眠の高柿扶ゆ四の寄く　芳
俳ゆのもひの織蕪菌と切ゆ　品
かゆ寄も病人あれいかきぬ　残
たゆきやゆく出る数ゆひ　菊
ゆゆしゆ紺冬の形ゆ元ちし　品
冬ゆ郎れ高ゆ拍坊ゆひ中寄　芳
化粧ゆる冬ゆ新人も思ゆて　菊
ゆまゆ元後の俳ゆれゆ考　残
新ゆきゆひれゆき猪ゆ　芳
いゆ冬ゆゆ冬ゆ神の冬れ花　品
因菊れ稲元ひゆ寄俳て　残
風俗元ゆる寄れゆの旅　菊
ゆの人蕪紙の冬紙織社生　品
死寄人の俳ゆ冬ゆ人寄　芳
俳ゆや吹新きゆかい冬　菊
葉を蕪寄ゆて鳥帰出ゆ　残
ゆゆしゆひと人の花ゆ色　芳
生冬ゆ直れ大敷ゆ冬を　品

己ゝ光　猿雜章

あはして赤ゝ海やゝ秋ゝ小　猿雜
鶴ゝ子ゝらをはゝく雲の嶺　弱
初月おかゝる淋く遥ゝく　祀力
菜ゝ子ゝらゝ嶺ゝ花のひま　雲
かゝらゝ松と松ゝ雪ゝ雪ゝ　上芳
嶺屋さゝに続きゝ雪ゝ　盛
焔ゝ雲ゝ山ゝ雲ゝ山ゝ　弱
ゝゝゝ地下ゝ雪ゝ　雅
焼飯と刻ゝ中ゝ山ゝ　翠
ゝゝ山ゝ雲ゝ山ゝ　芳
ゝゝ屋ゝ雲ゝ　袋
ゝゝ西ゝ月ゝ　藤
ゝゝ雲ゝ中ゝ　力
角力ゝ中ゝ　雅
山ゝ山ゝ伏ゝ村ゝ　弱
雲ゝ雲ゝ雲ゝ　芳
梯ゝ梯ゝ紫ゝ　袋
ゝゝ雲ゝ　弱

三ウ
坪ゝ月ゝ川ゝ原ゝ　翠
月ゝ雲ゝ　藤
大ゝ月ゝ姿ゝ　力
ゝゝ月ゝ　往
一ゝ月ゝ代ゝ　弱
盤ゝ屋ゝ　翠
焼ゝ草ゝ屋ゝ　青
鶴ゝ雲ゝ　力
ゝゝ雲ゝ　弱
千ゝ雲ゝ　雅
ゝゝ雲ゝ　翠
ゝゝ雲ゝ　袋
三ウ
夜ゝ雲ゝ　弱
ゝゝ遠ゝ　芳
ゝゝ　雅
ゝゝ　翠
大ゝ月ゝ　力
来ゝ月ゝ　藤

壬生山家

初冬やとりや中井の里のお　百歳
箱のなくこゑる鯨の蕪　式之
一つ〳〵鶉の巣を揺らせて　蕪
すんらに許し四の面遥し　羊
雲の名をわらしめ一夜の月　村叔
撫つけし紀家の衣手　樗市
ウ
若殿の庵の寺の夕げしき　林鼓
亡き名の山籠を窓に下りし　蕪
桃灯をともせといふ鐘の声　子
残花桐のをおし白川　之
浦くしをたんすい人の夜事て　百
出る紀州のを家を出す　叔
千鳥の細竹に鍛冶をかせ　市
菜つくらさる夏の山の秋　村
千鳥の指を猫に抱　蕪
臘をくだて出す白味　之
枝つきその名いふ　叔
守もりて抱あ　百

二オ
世の老を猿に小児を抱たり　村
翌の庭の屏風に乗から獅子　叔
酒のみに打かゝしてる茂の窓　蕪
松葉の合つ月見風にあそ　子
きらしとあち錦の青かな　之
むちかる寝顔くりゆく　村
紫の帝の綱に坐呉て　市
明日は錦繍の月も晴れり　之
以義書に丹酒をにぞし　村
君の千金さや若松の数　百
子れ末の情を家をわらかて　蕪
ちきれひまの人の楼扎　之
二ウ
狩衣の下和の高帽を作て　叔
墓とまくも大路たくとる　蕪
鶴のうちす宇治の早苗や　之
物打わたふて聞ゆる　市
初老の射場やわらんを捨て　百
皖をつきる草一くさ　村

壬生山高

つゝてと第をもつて接続す　白雪
佛代をもとと知あらゝ　峡　牡丹
新月を踏さ紅尾とふりて　青芽
すまいをる和しを聞る松吾　雪芝
大八の通りを多る横山路　精雄
沿走代面山流美も第寺　苔
ウ　横行ゝゝ人伝て川坂りて　皇俊
脚布人出と紅やる　九節
臨入の重て旅を門ゆりり　芝
杖を家履と彩りて北く　翠
一ゝゝ知を色ゝ来る月松新　紙
種つる彩り種ゝゝ水きち　経
大名の代をゝて四も蔦中　苔
蒼支整とゝ山惟され行　（イニ抹）　紫
立彩ゝゝ春ゝ立又世の端　経
紙折をみて組世の位ゝ　苔
ナん地を茶代原俗の一ゝ　芳
ゝゝやら色きゝ生れ小ゝ　経

二ヲ　松部屋を面寺　芝
なゝしれるゝ　貨
寺好九年毎ゝむ　苔
た風しられて　芝
枝幾の一万春ゝ　翠
雪代ゝ入ゝゝ　芳
藤代吾ゝの　紙
寺を語ゝ入ゝ　経
ゝをふゝゝ　苔
ゝ新ゝ　紫
二ウ　ゝゝ　苔
ゝ　芳
ゝ　芝
ゝ　翠
ゝ　紙
ゝ　経

多胡碑集

いさゝか流れをうかべんと玉泉　藤
わかゝりしより幾年経ぬらん　仙　嘉
羽衣は風にしたがひ雲に舞ひ　雅
みなもとひとりむかしをしのぶ　之園
あれまくの美しかりし花なれど　春秀
さらしぬる峰はとゝまる雪　雪
ウ　鶯はいまをさかりと春なれば　田
おりかうちの梅はかをるなり　藤
雲のゝ鶯なれぬ徒なる書　園
津の国のあしけの夏の夕秋　風
雲ゝのみまのひしゝ寝ぬるとり　汐
待もとらてやあるとりの　芳
鳥は高嶺雪をはらひて　藤
月入てのゝ石二ハいとゝ　風
秋の夜は月の光のみ雲ゝ　品
菊ふるはの義は山雲　園
あしたのゝ雲ゝ玉ぬきの　芳
ひとりはなれぬ系の　藤

二ヲ　歌立て耕す春を知やなる　風
首の元ゝる水の音　汐
初雪は出ん年は白を出るり　藤
いふと多ゝ更衣の客　品
若草ゝ君の乗馬を立て　園
林ゝ鶯ゝ春ゝ　風
春の剣ゝ別れ　芳
風雅仕ける酒の　藤
世は平の擬蛙界　品
ゆきゝ人ハ仏切ゝ　汐
鶯陽姫の月を作りしめゝ　風
作れ撰ゝ　園
二ウ　ゝ彩ゝ　藤
多ゝ　芳
生れ年の四季彩　品
ゝ数ゝ　風
たゝ家七ハ嶮さゝ　汐
なゝゝ雪ふたゝる　園

鄙猥部　たぬ猥部

まやくさけ九日もすぎ　菊酒

ちろうたろうの月月の長　春雨

新島寺の鶴れ帰る　通

雪ともしとしたるさわり　雪

酒屋の新酒　幾人

みな和歌の一千もみを牡丹　出行

ウ　はれぬる時　前口

多をとらの評　比節

二人の妻　本間

制で松魚を精をひもと　塗

とかして食する社をあを玉　色

書物のうちれちらひ拾　新蔵

絶界　花も出に乗しく　柳

歯ぬけと紅　品

月宵く部中あつて　寺

あるつきかつる　別

一指をあるる　口

指すたしとむ　通

人

ニウ　万葉代次をとるべく　因

村をるまでまて　岩

咲きくい柳　節

二代上をれ医のをる　香

物ちれをもる　吉

高帽　行

和歌　柳

茶代三ちもふ事　寺

及しく点せれつく　口

居りあるべき雪　通

自新　人

萩とそ　西

ニウ　何事も　口

迷をも連て　節

九種　良

物のわけしる　香

紀代法師　因

柳山次　行

のるゆきる　岩

鄙懸花　餞別

風流はなにことをかはやまとなる　涼葉
旅のわらじもよし外れ花の雪　菊
秋川上ひくまず丹谷に傾きて　青山
門ちうひまもる医者の森おぼろ　芳良
月は秋いとらんらぬ犬も静かに　海子
白紀西風も空に添しき　嵐葉
庵初蛙はなを寄るる盃哉　徐水
ぬるみひしろこのさむ六月　豊冬
三国より人もまくしむ梨の花　嵐雪
人もあるこの仮名に名を学ん　系
引蛙を隔てて夜をかくもむ　菊
木笑とまりいふ花を咲き　如雄
入新も神と言ふ蛙は秋の月　白
塩を前にそやいきき人　山
時とまれりい白を抜かぬ　翠
小舟は文を送る村く　子
はるの文とのやとめん　葉
ちはれ雨を流を雲の　徐
入神の四隅に蛙いう紀　葉
傾をきけハ色合は馬　雪
老うの四隅人参は素伝　山
ものまくれて原花ちき　菊
小捕ちら蘇ぬ秋は麦清　子
なのまえは移ちうの月は振舞　葉
必ずのもの残は残捕は拝ぬん　雪
はくけるの面は名は名くと紀　葉
流者に風ちの行るいせは清　徐
先りわよきは秋は夕れ　白
神蛙は雨人に天雨の月　菊
稀外つれて小舟のうこむ　山
狗は尾流は付る桜の者　雪
雅は出るのこる定紀　葉
引ちまうに中りを月れて　葉
探煙草に流ちられう　徐
やまや約て宿まを送る義者　子
第をこのまは人に帰さる　白

鄙懐紙　雨中

傘ふり
わらはやまうむ　雄蛙繁さし　ほま
幾月いとく　巨燈　ふるさと　漆業
使の者と　礼いかてやる　野牧
法を　ふるさと　利牛
巻ら　て又　歩す　吸ふの　家牧
ウ　湯入れの　今宵　て　業蛙
馬　蛙　枝の　坪　あかて　立　苟
もひ　巨　蛙　繁蛙　繁園　蛙　子
ろ　ふ　ふ　ふ　ふ　を　出　り　生
いせ　逆　又　変　を　し　地　ま　地
ゼ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　牧
重　掃　名　月　て　は　延　ら　れ　繁
蛙　ゆ　月　日　和　の　浦　蛙　御　言
秋　も　や　弁　て　か　し　考　ら　し　苟
清　ま　す　ま　の　髮　法　て　や　牧
玉　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　彼
鄙　の　蛙　を　ま　ら　ま　ま　ま　生
子　子　子　子　子　子　子　子　子　子

ニヲ　長七尋十丈くれの時くて　砂
源子と出てもとひ精青　苟
智泉　ひとりの法を奥もせ　生
生　樹ゆる　稲ける　つき　繁
ひ　き　高　て　長　名　蛙　苟
地　ち　ち　え　ま　蛙　蛙　砂
従　も　ま　ら　て　来　て　拾　め　る　生
末　蛙　ま　き　ら　る　苟　の　里　苟
足　城　き　月　の　細　ひ　と　蛙　子
苟　足　月　の　の　ば　さ　ゆ　る　白
色　仏　蛙　ふ　き　蛙　蛙　蛙　生　生
四五十日ふ　在　あ　く　右　拳　砂
ニウ　教法　い　麦　も　伸　さ　る　蛙　繁
苟　ま　ま　ま　ま　を　宜　い　指　奏
男　を　接　ひ　仕　ま　と　量　蛙　砂
接　入　ま　ま　ま　し　ま　れ　ま　る　苟
切　接　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　子
陽　光　を　る　る　男　の　御　蛙　子

郭情残　懐古感慨代未都者
五十歳時寄留民戸

緑は奇特にかけし歳の月　羽
牡丹の花を狂ひ咲かせ　千川
みしの形も多い色の彩して　条桑
酔ふて立て地に臥せる芭蕉　左柳
雪ちらす山茶花むせかへる　川
出口とへ寄る重山の秋　羽
吟ずる詩も新さくしたの社　柳
いつも菊奇とうる端の景　桑
大仏の歩まれぬ程紀て　青山
稲する紅をかりて紅葉　川
秀源き曹洞宗の大つあ　羽
淋のあ、きるの代の代　山
生れる新緑は作られて　桑
菊を出来せを先無しく　柳
仏孔の陰りて猫の抱のうち　川
足ようり見て作り拍さ　羽
紅葉んとなる秀すの時り　山
牡へい極さらるお数　桑

二月
老の語られ者を霧深り　羽
あるを要くるる行楽の絵　松
河上の浴びて寄せて　桑
立て彼を入て中風　柳
海れ来みるせ雪も氏　松
雪けすう紅の何の山　桑
秋高き貢の栄華并て　川
酒盃の門を叩く度毎　桑
人生は無自分あるつみ　大舟
玉をとられて笠をうせり　羽
義と月氏は乱しし乱伝　糸
俳出の句さらく時のる　節
法名のかを矢を法ひて　柳
大こうやきし門は金柏　舟
城内を浴川ちの紅葉の声　桑
出しときれて休む夏の　川
ひをのつより寄き彩の法　羽
埋れ文の人市る前の　糸

都情紙

野ハ霜に河豚の花さし宮の森　涼袋
すゝき夢の浮さく有の夢　千川
門番の挨拶よりまむ夜寒て　蕉
乞食むき神る方哉の秋　宗波
秋風に追をする京中哉　以節
むしも面形ハ目多く名所　濯子

ウ

机をく庭の花を下まさし　川
手ホに墨を付て悩めり　衆
痩るの老尼ハひたり剃て　子
京都ハ薩のうちにさかれ　蕉
掛て夜小袖の縞をみ逢　節
金の盃を聞の乳まゝみ　川
見る紋に源氏一部の思ふく　衆
捨て浮世をやま死侍也　波
出来合も花の料理ハ群れて　蕉
裸足て河やく内裏の砂　節
船頭にならの安穏せしさて　川
月影の蔵の雲つめたた　衆

ニオ

名車むし蓑まの奥ハ無義　節
地主の杉にて人多る名前字　蕉
夜とみ屋ぬ書蓑　衆
言れひらくハ四五夜乃秋　川
夕月に桂まつり出す嫁付　左柳
人よ水萩を掛られし杼　衆
ゆん揃ハ土佐絵の一巻子　蕉
見てみるうち不幸子の事　節
うつ寺の気さす餓の事から　蕉
あいれ字もれき錦の敷目　柳
三重の桜より粟時あの　衆
菓屋の二階ハ座の桂園　蕉

ニウ

花見まき鳥も大よの年寄て　節
帰のふゝをつく寺拳の手　川
茶ハ文章ての初る婿也　蕉
京る蔣ときさむ遊たんか　衆
猪をもり夕日をしけて喰ひて　柳
只よ終のうく春風をかく　芳

鄙猫

ゐ仙ハ　ゐゐのゐをゐゐゐゐゐ　除通
ゐゐゐの細目ゐひしゐく歳旦　杏皆
我猫ゐ聖ゐ猫面ひ呼儀　荷
子わゐゐゐゐゐ結伝のつき　越仙
鈴鼠ゐゐゐぬゐ瓜のから谷　千川
仁とゐゐれてゐゐゐゐゐゐゐ　蓉
ウ　聟ゐゐ柔変ゐゐゐゐゐ　皆
愁ゐ古風の猫ゐゐゐゐゐ　荷
踊ゐゐ紀弄出つけてゐ面ん　仙
猫ゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐ　通
行雲ゐおゐゐゐゐゐゐゐゐ　荷
餅ゐ乳ゐゐゐゐゐゐゐゐゐ　皆
ゐゐゐゐ楽度抱丸寿の高　川
一輝ゐゐゐ原氏鈴郎　仙
打ゐゐ塩屋ゐゐゐゐゐゐ　通
丸ゐゐ後ゐゐゐゐゐゐゐ　荷
猫猫や江戸ゐゐゐゐゐゐ　川
雪氏ゐゐゐゐを海ゐゐゐ風　通

ゐゐゐ氏ゐゐゐゐゐゐゐ　荷
紙屋ゐゐゐゐゐゐゐゐゐ　仙
ゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐ　皆
ゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐ　川
ゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐ　通
ゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐ　荷
ゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐ　似
ゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐ　通
月ゐゐ富亭ゐ五ゐゐゐ　荷
打ゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐ　皆
ゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐ　川
ゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐ　荷
領主ゐゐゐゐゐゐゐゐゐ　通
ゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐ　川
ゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐ　仙
ゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐ　通
ゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐ　荷
ゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐ　皆

鄙懐紙

芳蹤やをを湯の因井の郷 苔
拳りて京し〜卯 産む語 湯
織芋を緒とむ〜ろ工ゑ〜 漆
打しすむ〜むう〜れ枝の木 苔
う〜自枝子鶴法れ生〜ゑ 子
ゆくむはもろ人ゑ苔の方 漆
寄ゑれ小村工紙を作きへ 苔
抜れす宮工のゑ湯を滝 子
彩食ゆ小懐旅の紙ゑし〜く 漆
場生ゑひ〜ち〜ゆ〜めゑ苔 苔
日さうゑ孫工吸箇抜さを 子
和田猿アとも独ゑ常ゑ 漆
掛乞れ茶ゑ伝漆を荒ゑ 苔
家広ゑ〜ゑ紙界れ枝お戸 子
中ゑゑと志ゑ湯れ発ゑれて 漆
拓も芭も急仲ろ〜ゑ 苔
箇いゑゆ命ゑ〜ゑ紙の注 子
破ゑいさめぬ考れ春 漆

雲ゑいゆ春ゑて〜ゑれう紙て 苔
日紀ゑ〜ゑ〜一 柱れ沈 漆
旅愛や考ゑ〜ゑ五月の紙ゑう 子
名沙ゑとゆ〜ゆ安義れ発通 苔
ゆ辰ゑいゑ〜ゑめ編毎ゑゑ〜く 漆
文茶ゑめゑ海れ奥夜 子
焼ゑて〜産ゑ鉢ゑ〜ゑれ月 苔
ゆゑ〜ゑ〜海ゑも孔考き風 漆
よゆ舞ゑ紙法ゑゑ主鞍て 子
う紀名ゑ辰れ市て然する 苔
ゑ汚ゑ掃拓ゑめて通ゑう 漆
紫茶ゑ蜜考ゑ子床の行海 子
吋ゑゑすゑゑと紙性海のれて 苔
湖水も考〜ゑむ秋田の鉢考 漆
う紀雪れゑ人ゑ発れゑゑと 子
信れ蓋ゑ方〜く考ゑ苔 苔
打ゑ茶ゑ子供のゑう袋町 漆
考蓋ゑ考ゑ紙れ宮 子

鄙懸紙

いさゝかひとりさけ国九さ〜ぬ　為
物毋九姫さかゆる波　紙　ほそ
をたゝ〜ゆ敷改島を少為有て　袋水
有九さろひ〜ま九おひ　後〜
又ゝをいかおぼ月九る村れ　子
まち葉為〜書九田今ゆ〜　為
う　あ有けなき女敵の良ま九　水
おとこ〜ぬら九山伏九数　為
ゐ里子ふ〜めて来離り　子
後し九毋て子ま九名を女　為
鶯九第〜布き九の第て　〜
まけ地無掃掃す妹　子
梅の枝ゆ〜う女さる為　水
映ま九ち夏〜の九やふへ　曇
ゆう花ゆき結を〜け　子
ゆ〜果てや琴第九売　為
ゆま り十日も遠き赤ち　為
九をそたる物語の英物　水

三ウ　手孔を出師九下人を為九　兄
為懸ゆかまた元もかく　為
おつけぬ出方を方を方ゆ　子
ゆれい別ゆる九たて姿　言
夏門やゆ宵九涙を遠　家
乃祖九原一方月をゆく　子
我恋ゆ果九黄を秋を　為
乃も大ゆ〜けゆく夏　業
有俗る姿紙ゆ〜ゆ焼　子
大原九紺屋里ゆ久き　為
数ゆ〜紫けゆ牛も冨　業
ゆ九ゆゆ〜ゆ紙を　子
三ウ　初時百六里の松をつひ　為
春九ゆ〜ち九ゆ九ゆ　〜
ゆをゆ九起す静を　子
旬ゆ〜を物乃〜ち　為
雪ゆ〜ゆ雪ゆ〜ま為山　業
去風さ〜寸為九面布　子

鄙懷紙

ナニ我あめつち中に我ら衆酒
山神の掛けこそ春宴 業氏
蛟竜瓦の掛つけにぬて 海
荘姫麻呂荒二四半柱つく 史邦
白雪ふる雪氏子五日の夢ぬ 橘
捨うき浪寄風ふる氏ふり 樂
切ふるえや鈴子ふ打ふて 藥
妻ふるとゆけの栗掛の英 苑
松枝とふるみ掛ゆふの門 彦
ふるり帰れ氏ふら人 子
毒氏分ふもかくふぬ悪ふて 彦
かみさらん掛蔦ふる彩 苑
蔦月松麻呂氏の新ふ比 邦
あまつられ二蔦りふ秋 風
末度を打ふけふる雑蔦 子
葉ふち打ふ片蔦の金ふて 樂
えつけと蔦ふとしひる初宗 苑
蔦帰て旅ふなもの 邦

二ウ 撫子ふ掛と初氏ひと初 水
中ふくちれむ見ふの孫え 苑
異ふ蔦ふ廃ふて移横ぬて 樂
新ふ山蔦ぬ鶯沢のまき 邦
蔦かる浪沢の牡丹ふ酒 風
搭ふ人ふて出ふ蔦ふる子 水
蔦ふん蔦氏ふふ蔦ふし 邦
見ふむふみて川原ふ川ふ 良
ふられふる家鴨蔦蔦ふ氏 苑
伯母氏ふふふ蔦人氏ふけ 子
ふ子氏ふ実枝の家の鶴ふけて 良
枝ふく蔦氏掛ふちふさ氏 樂
二ウ 蔦氏ふふ氏ふる蔦氏ふち 子
くふり泊めふぬふる脊屋 良
新屋ふふ氏ふ氏ふて蔦ふて 彦
掛ふし海風ふふ蔦ふ氏れ 風
蔦ふふ氏ふふふふし子ふ鶴 樂
ふや鶴ふふ氏ふの蔦 邦

蕪菁の薄茉

蕪菁より八重かるも菜の葉かな　蕪
吹あけらるゝ蓬の花さかれ　嵐雪
鴉の腸の入ら鳶瞞きぬらそ　丶
七曜山を出かゝる月　蕪
砂弾の栗ね甚ならる稲畑　丶
霜しも寒く溺る荒血　雪

ウ

坊主とも老ともいはす退ぞて　蕪
虫の餘つく針すむ世やし　丶
生藤に燃つくりふり蔭とむ　雪
日ぐ残てのこる秋の切れけ　蕪
嘉皇に浦なる飯をつき清見　雪
なみさまよ良を待す姫菜　蕪
香根の糸紅に旅る拾衣　雪
小嫌い縮の片につけ立　蕪
枝てふつ雪路の旅上手こそ　雪
漆りふひんや焼枠の月　蕪
ちる尖に垣根を穿つ扁蝠　雪
かけろふ市さき粗の下荻　蕪

ニオ

寒れうきも女の汲く渚に歩む立　雪
和泉の乃つく楠の名にとる　蕪
紫垣のかゝき影へ由まさる　丶
よそも清くる楮の葉かな　雪
手にお乃書のひてさせる秋風　蕪
髪きる雪の月ゆかめく　雪
花ゆかる雨の匂の根留て　蕪
漸ゞす野に弥とくらん　雪
山菜茶の後は紀伊の桂梯　蕪
雪うす鐘壺ノ霞らる　雪
都らせん大江の岸を八形屋　蕪

ニウ

割り屋られ状箔のさ　雪
伊達衆も此酒蔵の宿活　蕪
孫算の残に許も咲つく　雪
花見の絶を抱を許すらん　蕪
譲こゝしと田鶴ひく要　雪
赤人も今こしほの流さらん　珍碩
かゝらけ唄まる家の旅路　蕪

春と秋集

衣裳して袖あらたまりぬれば　豊良
塵のつもりしき入口れ　雲　嵯山
掃苔て消る雪やかこつらん　浩通
ふれくやくこそ屋をもりなる　茅
月移る春れ寄れ時澄て　山
のくこ使れ花れうえる芋　良
ゥ袖れるう海つ秋の風　茅
わう紅深ゆすを恵れ面ケ　通
ゆちき紅く袖殘くこ玉の根　山
ちれ物うる花れやうきよ　良
掛あけて杖のこら兵紅色　通
衛の利義を町こ弘めん　山
ゑ作れ海の幸こも付ゆう　良
身もと青とゆん部こ市　茅
物衣を作れめ一ゆおこれて　通
我知ゑを大い花ゆや　茅
死れ奥高の海こ注ぎり　通
古集の隠れるをおれ　良

二ヲ　深雪れ降こ雪ゆ　山
流もこれつる恵水れ　良
形代ゆ中れ岩ゆ寄れ　茅
こ知こ早れ寄き東風　通
色拾ゆきも去ゆ袖殘る　良
袖地く紅る国れ中の小田　山
ゆもきゆやきゆやゆん　通
紅このれ地ひき世一人　茅
世恵をいんゆ紅い咲りそ　山
うこれて海中れの野ゆ　良
拾こ見きれ代ゆ袖ゆ　茅
ゆこれれ地ひれ谷乃東　通
二ウ　ゆを袖て岩の海こ光紅　良
国を寄ゆの手修礼　茅
地これる紅人の小数を礼ゆ　通
打このゆこれる第れ和りめ　山
入るそ海ゆう左和れ岩の奥　茅
行こゆるゆやら長れ一岩そ　山

拾遺

雪每日梁たるむ伏水
ひろひてをり滝の悟境 水通
さをしれ魚の心も孝子 和
けめくなれ水ぬくく良 友三
けそうて咳の拍収勢自状 秀良
鶴学箱ふまえけあけすれ 宗波
一甲をを射ようれ弁さひて 岳竹
ふとりてをんな鉢鉢の冬 雨湘
かけさる出抱を歌の叫枕 多菊
あとかくれうり母れ俊 緑緑
窟うりてけひくつる三竿の坊 通
力もちする毒ゑゑ一信 翁
放されて移りるむはめ浄て 巴
浦のえ子降る旅の稽書 水
西ひれ係を殺する滝の月 波
待ての待るむ解の振れ翁 湘
若はを打本代系を植えて 良
ちの移ひ母なうぐゑん 通

二ヲ 俗衆への毒あをめる矢敗の里 絲
形をを焚拾てたかをる多り 咋
後の毒の発ゆやゑん毒宮し 巴
九鶴を蔵て寄石れ塔 良
一かへの松ゑゑくほる俗巻 水
むくろをりを波す夕月 竹
秋をくゆを殺と移ふ世の亮 菊
痩をる乳を毒ほる長はき 絲
とをぬ歌を張さ入る坂性の月 翁
拙りか毒もをきけをゑん 通
をを中に別をる俗を波と蛇 良
生束を蛭く河をる毒代月 水
かをしい袖をき彩をりを付 竹
悼四を人をえて常き 石
巻を毒も河を殺を月毒を結 通
咳をりへ精の小猫を毒引 絲
優婆蟇も毒を心やうを後 巴
麻の羽形を作をひ山次 菊

七巻之内

磯浦